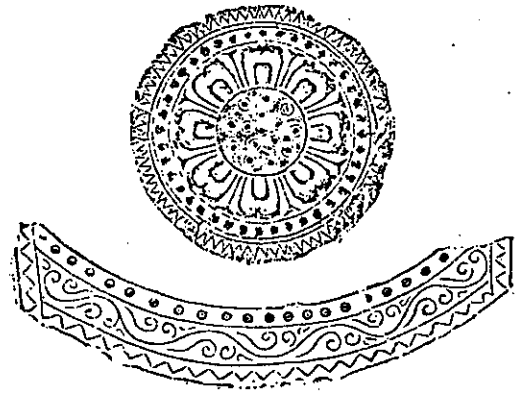
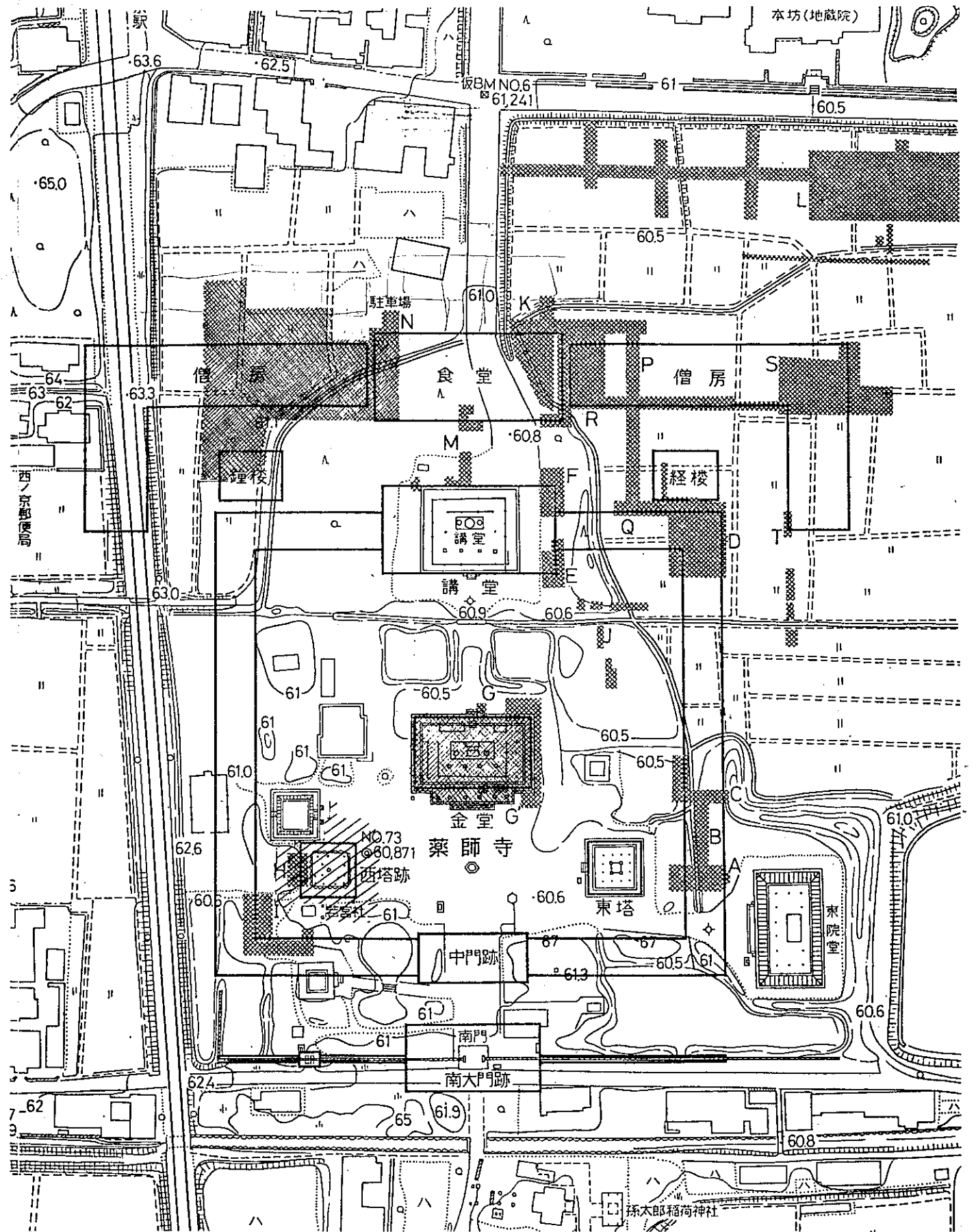


# 薬師寺西塔跡発掘調査現地説明会資料



昭和 51 年 8 月 17 日

薬 師 寺  
奈良国立文化財研究所  
平城宮跡発掘調査部



薬師寺発掘調査位置図

## 薬師寺西塔跡発掘調査概要

### 1. 経 過

今回の調査は伽藍復興を念願する寺側の要請で、西塔の創建時の遺構を明らかにするとともに再建の学術的資料を得る目的で行なった。調査は薬師寺の依頼をうけて奈良国立文化財研究所が昭和51年7月5日から実施したものであり、塔基壇を中心として約550㎡について発掘した。

西塔は享禄元年(1528)筒井順興の兵火によって金堂・講堂とともに焼失し、その後再建されることなく、万治3年(1660)西室にあった文殊堂が西塔跡に移建された。これまで西塔跡として残ってきた基壇状の高まりと礎石の多くは文殊堂に伴うものである。

西塔跡については過去2回の調査が行なわれている。第1回は、文殊堂の解体撤去された昭和9年(1934)に、足立康氏による基壇まわりの発掘が行なわれた。この調査では基壇上面の焼土層より、塑像片・和同開珎・勾玉を得ている。第2回は、昭和44年(1969)に薬師寺発掘調査団(団長杉山信三氏)が現存基壇の西側で西面階段を確認し、創建時の基壇規模の一部を明らかにした。今回の全面調査では、基壇およびその周辺の施設の全貌を知ることができたので、ここに中間報告を行なう。

### 2. 検出遺構

基壇は一辺約12.9mの正方形で、復原高1.5mである。四面の中央には幅3mの階段が取り付く。基壇からの出は1.8mある。現存基壇の上面から約70cmまでは、焼失時の焼土を含む攪乱土が堆積していた。これを取り除いて、砂土と粘土の互層によって積み固められた基壇積土を検出した。残存する三個の礎石のうち、心礎は原位置をとどめているが、他の2個は据えかえられていた。基壇上面では四天柱と母屋柱の据え付け掘形を16個確認することができた。掘形は一辺約1.5mの方形であるが、すでに根石等の据え付け痕跡は検出できなかった。裳層の礎石掘形については四天柱・母屋柱に較べて浅い掘形であったためかすでに削平されていた。なお、

心礎には掘形がないことから、心礎のみは基壇の築成前に据え付けたとみられる。

基壇周囲の地覆石はほとんど抜き取られていたが、西面南半部と北面の一部に当初の形で残っていた。石質は花崗岩で羽目石をのせる部分は一段低く細工し、基壇内に隠れる部分は自然面をのこす。地覆石に立つ羽目石は完全なものではないが凝灰岩で、残存するものから幅60cm、厚さ10cmの切石であることが判定できた。羽目石を立てただけの束石を伴わない古い形式のもので、金堂と同様の基壇化粧である。

基壇外周は全面石敷にしており、地覆石の外側を60cm幅で犬走りがあり、さらに、この外側に扁平な石を立てて側石とした雨落ち溝がめぐる。また、基壇端から4mの位置には、一列にならべた立石(見切り)が四周にめぐる。この立石列は一辺21.5mの正方形をなし、西塔の外郭を限る施設と考えられる。敷石はこの外側にもつづき発掘区外にのびている。あるいは、回廊内は全面石敷であったかとも考えられる。

なお、創建時の石敷面は享禄の焼失時にはすでに埋もれていたらしく、石敷と焼土面との間には灰黄褐砂土の自然堆積層が存在していた。

他の検出遺構としては、発掘区南端にやや時代の降るとみられる池の汀線と、発掘区東辺と基壇南辺にそって、石敷および基壇をこわしてつくられた竹筒の上水施設がある。

### 3. 出土遺物

今回出土した遺物は、莫大な量の瓦類のほか、塑像、銭貨、青銅製金具、土師器(灯明皿)などがある。中でも注目すべき遺物は、主として基壇上層の焼土層から出土した塑像であろう。

塑像 東西両塔には釈迦八相の群像が安置されていた。八相のうち入胎・受生・受楽・苦行の因相が東塔に、成道・転法輪・涅槃・分舍利の果相が西塔に配置されていた。東塔に安置された群像は江戸時代正保元年(1844)の塔修理の際にとりはずされてしまい、現在は若干土の付着するものと心木だけになったものが約160点のこっている。このため法隆寺五重塔にある塑像群によってしか、その原形をうか

がうことができない。今回出土した塑像片は頭部、手、胴部、足、袈裟、甲などがあり、なかに如来像、菩薩像とわかるものもある。また、彩色や金箔が残っているものもある。胎土は雲母の多い緻密な粘土を用いている。この他、塑像の胎土とは異なる砂粒を多く含んだ破片がある。直線や曲線の凹凸に富む文様があり、白土で彩色されている。これら諸相の背景となった山や巖洞、台座を現わした一部であろう。

瓦類 軒瓦約800点と丸・平瓦が焼土まじりの褐色土層より出土した。軒瓦は焼失時に近い室町・鎌倉時代のものが多く、本薬師寺式や奈良時代のものは一割にもみえない。焼失する頃までには、創建時の瓦はほとんど葺き替えられたのであろう。

金属製品 極先飾り金具、厚板、塑像芯銅線、鋳、帯状留め金具などの青銅品が出土した。青銅厚板には「第二□」と陰刻したものがあり、相輪の一部とも考えられる。銭貨は和同開珎2枚のほか、淳祐元宝、祥符元宝、景德元宝、寛永通宝などが出土した。他に釘、鋸、座金などの鉄製品が多量に出土した。

土器 土器類はきわめて少量であり、焼土層と灰黄褐砂土から須恵器小片と灯明皿が若干出土した程度である。

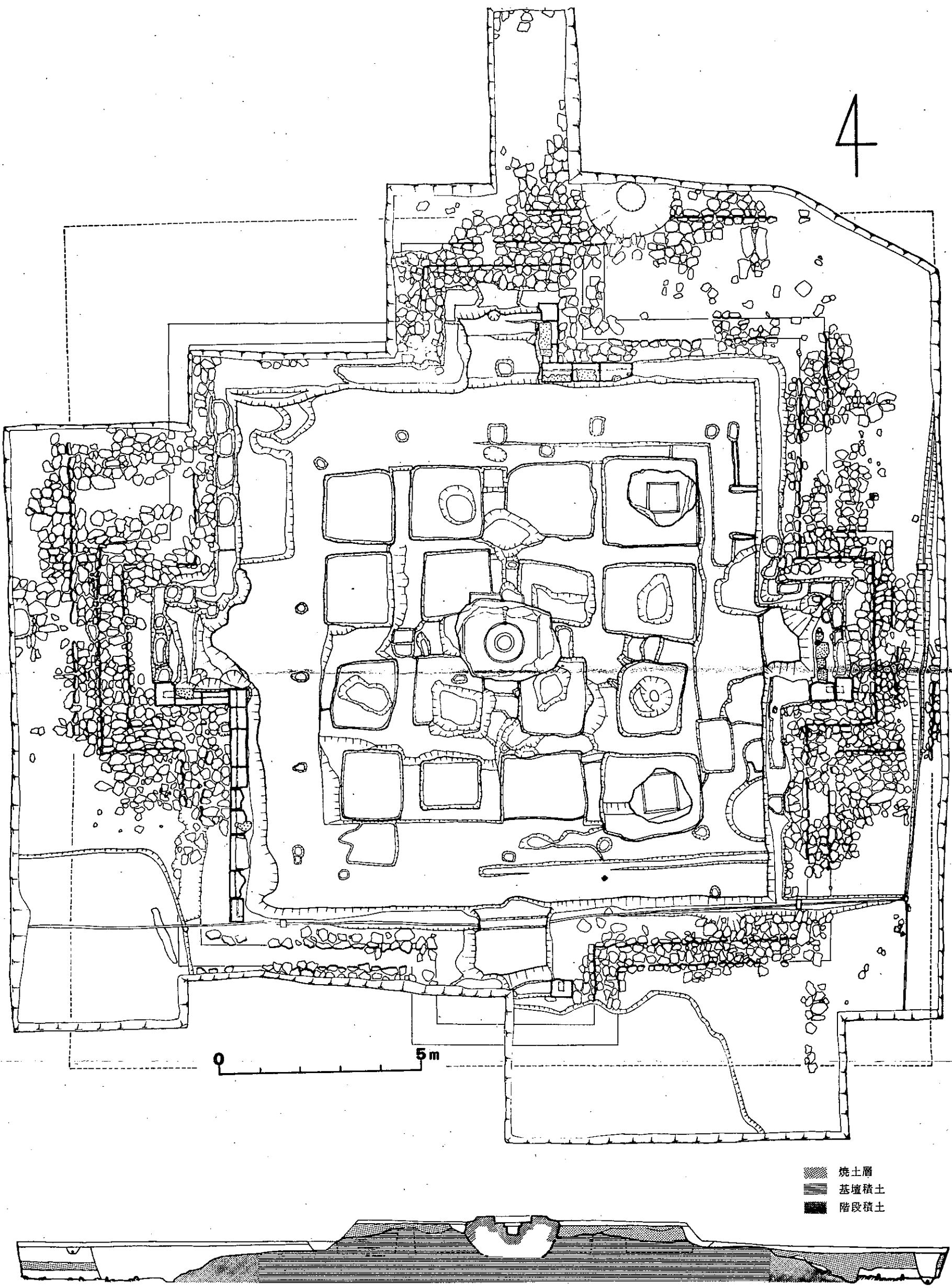
#### 4. 薬師寺略年表

天武9年(680)	薬師寺の建立を発願す。(本薬師寺)
養老2年(718)	伽藍を藤原京より平城京(右京6条2坊)に移す。
天平2年(730)	東塔建立す。
天禄4年(973)	火災により講堂・食堂・僧房以下の諸堂焼失。金堂・東西両塔は無事
永禄元年(989)	大風により金堂上層倒壊す。直ちに修営
建久2年(1191)	某女院が七大寺を巡拝した時、金堂の薬師や十二神将、東西両塔釈迦八相、堂塔の裳層について記す。
康安元年(1361)	地震により金堂上層傾き、両塔破損す。
応永9年(1402)	文殊堂建つ。

大永4年(1524)	金堂、東西両塔修勦進、修造す。
享禄元年(1528)	筒井順興の兵火により、金堂・講堂・西塔など焼失す。
正保元年(1644)	郡山城主本多政勝が東塔修理す。この時、釈迦八相の破損が著しいためすべて撤去す。
天明3年(1783)	東塔修理す。
明治31~33年(1898~1900)	関野貞氏を監督技師として東塔修理す。心柱の頂部に仏舎利奉納す。
昭和9年(1934)	西塔跡の文殊堂解体撤去す。 足立康氏による基壇上面の発掘調査
昭和25~27年(1950~1952)	東塔修理。
昭和44年(1969)	薬師寺発掘調査団による西塔西側の発掘調査

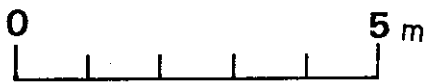
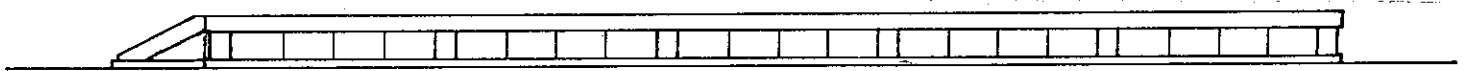
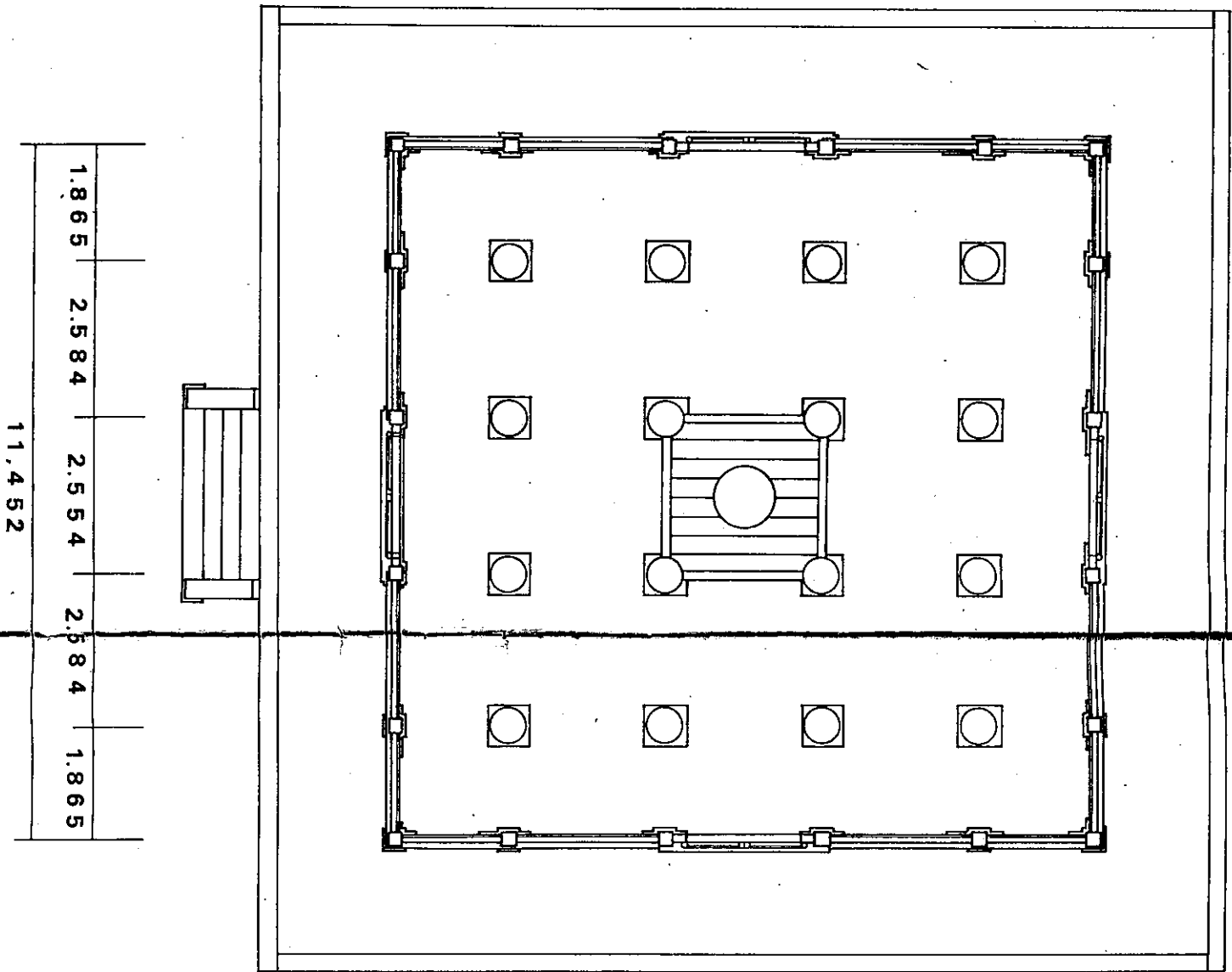
MEMO:

4

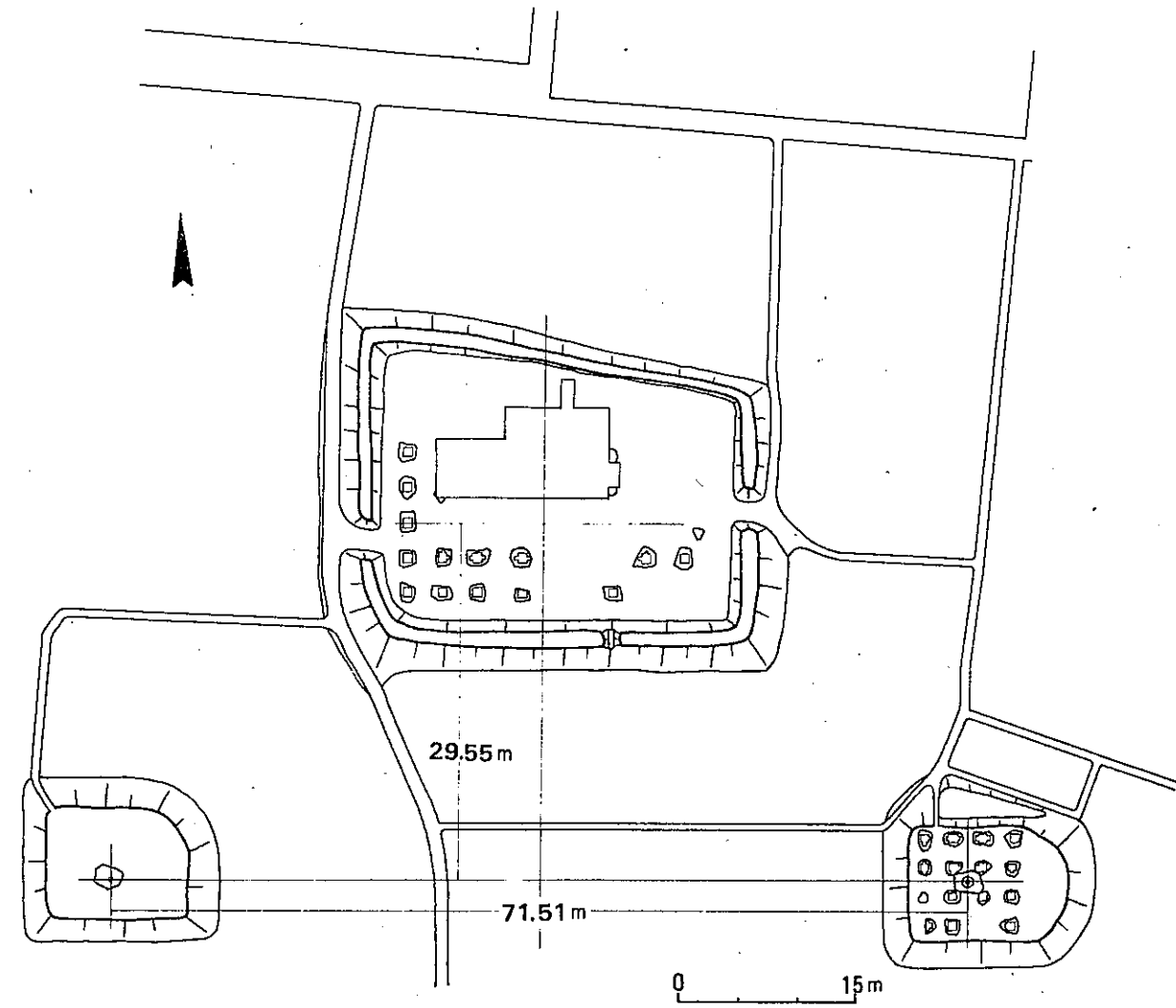


第1図 菜師寺西塔跡発掘遺構図

4



第2図 薬師寺東塔基壇平面図



第3図 本薬師寺遺構配置図